

博士学位請求論文 要約

保育環境における
「境の場所」としてのテラスの機能と特質

境愛一郎

(D121473)

教育学研究科教育人間科学専攻

2016年1月25日

【論文題目】

保育環境における「境の場所」としてのテラスの機能と特質

【論文構成】

序章 研究の背景と目的

- 第1節 保育環境をめぐる研究の動向
- 第2節 保育環境における「境の場所」とテラス
- 第3節 本研究の目的と構成

第1章 「境の場所」に関する諸視点の整理

- 第1節 日本の都市設計・建築からの接近
 - 第1項 黒川紀章による「中間領域」論
 - 第2項 日本家屋に見られるあいまいな場所に関する論考
- 第2節 保育環境における「境の場所」研究との関連

第2章 A園におけるテラスの機能と特質

- 第1節 本章の目的
- 第2節 対象と方法
 - 第1項 対象施設（A園）の概要
 - 第2項 観察とエピソード作成の方法
 - 第3項 分析の方法

第3節 A園におけるテラスの機能

- 第1項 分析結果の概要
- 第2項 園生活の玄関口
- 第3項 屋内と連続した場所
- 第4項 屋外と連続した場所
- 第5項 独立した活動場所
- 第6項 やすらぎの場所
- 第7項 猶予の場所

第4節 A園におけるテラスの特質

- 第1項 園生活のジャンクション
- 第2項 あいまいな場所

第5節 小括

第3章 テラスの多様性を踏まえるためのサンプリング

- 第1節 本章の目的

第2節 理論的サンプリング

第3節 テラス研究を展開するサンプリングの諸視点

第4節 対象園のプロフィール

第1項 B園のプロフィール

第2項 C園のプロフィール

第3項 D園のプロフィール

第4章 4園にみるテラスの機能と特質の共通性と独自性

第1節 本章の目的

第2節 対象と方法

第3節 4園に共通するテラスの機能と特質

第1項 生活・活動のジャンクション

第2項 つかず離れずの関係性

第3項 柔軟な生活・活動の場

第4項 生活・活動の周縁

第4節 4園にみるテラスの用途の独自性

第1項 B園におけるテラスの用途の独自性

第2項 C園におけるテラスの用途の独自性

第3項 D園におけるテラスの用途の独自性

第4項 A園におけるテラスの用途の独自性

第5節 小括

第5章 保育の時間的環境におけるテラスの機能と特質

第1節 本章の目的

第2節 対象と方法

第1項 「待つ」行為を含むエピソードの抽出

第2項 分析方法

第3節 「待つ」行為の対象から見たテラスの機能

第1項 テラスにおける「待つ」行為の対象の多様性

第2項 対象園の特徴と「待つ」行為の対象の関連性

第4節 「待つ」行為の方法から見たテラスの機能

第1項 テラスにおける「待つ」行為の方法の多様性

第2項 対象園の特徴と「待つ」行為の方法の関連性

第5節 小括

第6章 保育の社会的環境におけるテラスの機能と特質

第1節 本章の目的

第2節 対象と方法

- 第 1 項 インタビューの対象と手順
- 第 2 項 分析方法
- 第 3 節 D 園にみる社会的環境におけるテラスの機能と特質
 - 第 1 項 テラスを利用する子どもに対する保育者の意識
 - 第 2 項 子どもによる自治とテラスの社会的環境の発生
- 第 4 節 小括

終章 総合考察

- 第 1 節 各章の総括
- 第 2 節 本研究の成果と意義
 - 第 1 項 テラスの多様な機能および特質との関連性の解明
 - 第 2 項 複数の保育環境に広がる子どもの生活・活動の描出
 - 第 3 項 今後の研究・実践に対する基礎的枠組みの提示
- 第 3 節 本研究の限界と課題

引用文献

謝辞

【論文概要】

序章. 研究の背景と目的

研究の背景と先行研究の検討

保育環境とは、保育施設に配置される空間や物などの物的環境、保育者や子どもなどの人的環境、さらにはそれらを取り巻く自然や社会の事象などを幅広く含む概念であり（厚生労働省, 2008）、子どもの周囲に存在するあらゆる要素の総称である。保育において、この保育環境は、子どもの「活動への志向性が成立する根源」（小川, 2000）であると同時に、情緒が安定した状態で、子どもが保育施設に「住まう」（榎沢, 2004）ための基盤として、生活と活動を形作り、充実へと導く鍵として重要視される。そのため、子どもが保育環境とどのように関与し、生活や活動を展開しているかを解明することは、実践と研究に共通する重要な課題として認識され、これまでに数多の研究が行われている（たとえば、由田・由田・小川, 1994; 藤田・山崎, 2000; 廣瀬, 2007; 山田, 2012; 松本・松井・西宇, 2012）。

上記の先行研究では、保育室や園庭といった「主要」な場所およびそこに存在する物や活動、事象が主な対象とされている。しかし、通路や物置のような場所が、子どもの遊び場となり得ること（仙田, 2009）、子どもの生活においては、集団から離れられる場所も必要とされること（小川, 2006; Clark, 2010）などを鑑みれば、大勢の子どもや保育者が集う場所の外にも視野を広げ、その機能や特質を検討する必要がある。また、子どもの活動は、1つの場所に閉じたものではなく、複数の場所を跨いだ人や物のやりとりを含んで展開されることが指摘される（無藤, 1997）。しかしながら、「主要」な場所に研究の対象が集中する現状では、そうしたやりとりの存在が示唆されるに留まっており（山田・佐藤・山田, 2009）、子どもの生活や活動に対する具体的な影響を捉えるには至っていない。

こうした課題を踏まえ、本研究では、廊下やテラスをはじめとした、場所と場所の境に存在する場所に着目する。こうした場所は、複数の場所をつなぐ通路であると同時に、留まって活動を展開することも可能である（秋田, 2010）。そのため、「主要」な場所からあふれた活動や子どもを受け入れる場所として注目されるとともに（永井, 2005; 小川, 2006）、場所の枠を超えた諸要素のやりとりが発生しやすい場所であることが指摘されている（佐藤・西出・高橋, 2004）。以後、本研究では、そのような特徴をもつ場所を、便宜的に「境の場所」と総称する。

「境の場所」のなかでも、本研究ではテラスに焦点をあてる。保育環境におけるテラスは、保育室と園庭をつなぐ通路であり、生活・活動の展開が可能な屋根付きの場所と定義できる（横山, 1992; 小川, 2006; 文部科学省, 2014）。このテラスは、保育室と園庭といった「主要」とされてきた場所の境に位置する。そのため、その機能や特質を検討することは、「主要」な場所からあふれ出た子どもの姿や、双方の場所を跨いで生じる諸要素の移動や関係性を対象化することにつながり、保育環境に広がる子どもの生活・活動の全体像を捉える上で重要性が高いといえる。また、類似した構造を持つ日本家屋の縁側が、屋内と屋外の要素を合わせ持つことで（ムーサス, 2008）、子どもの生活に拡張性や創造性をもたらしてきたという指摘を鑑みれば（高木・小川・仙田, 1998）、保育施設のテラスについて

も、完全に屋内や屋外に属する場所とは異なる特質を有し、それらが子どもの生活・活動に反映されている可能性が考えられる。このように、テラスに着目することは、これまで明らかにされてこなかった子どもの生活・活動の一側面や連続性を捉えることにつながり、単なる個別的な場所の実態把握に留まらず、「主要」な場所も含む保育環境の全体構造およびそのなかでの子どもの経験の解明に寄与し得る点において、有意義と考える。

テラスに関する先行研究は、既にいくつかがみられる。横山（1992）は、観察と保育者へのヒアリングにより、テラスが複数の保育内容のなかで活用されている実態を明らかにした。また、張・仙田・井上・陽（2003）と鶴岡（2010）は、テラスを含む半屋外空間での子どもの遊びを観察し、その頻度や種類を分析することで、それらの場所に柔軟な遊び場としての機能を見いだした。加えて、佐藤・佐藤（2012）や高木・朝妻・永田（2012）は、遊びを誘発するためのテラスの建築条件などを指摘している。さらに、テラスなどでは、子ども集団の形成や交流が起こりやすいことも示唆されている（佐藤・西出・高橋2004）。総じて、テラスは、子どもの生活・活動を柔軟に受け入れるとともに、周囲の環境や他者との交流を促す場所であることが実証されつつある。

ただし、先行研究には、以下の課題が指摘できる。第1に、テラスの機能の全容が明らかでないことである。先行研究では、テラスの柔軟性を協調しながらも、遊びをはじめとする、予め対象に設定した場面に限った検討が中心であり、保育環境で展開される多種多様な生活・活動のなかで、テラスがいかに活用されているかを、幅広く捉えてはいない。しかし、その場所の意義を見極め、適切な環境構成のあり方を探る上では、よりボトムアップ的なアプローチにより、どのような子どもが、いつ、どのようにテラスを用いたのかを拾い上げ、その場所がかかわる機能の全体像を把握することが必要である。

第2に、テラスで展開される活動の背景や文脈が検討されていないことである。先行研究では、テラスで生じた遊びや生活行為を詳細に分類しているが、それらが生じるに至った経緯や、詳しい内容の分析は十分になされているとは言い難い。そのため、そうした際に、周囲の場所との間に生じる人や物、情報などのやりとりや、それらの生活・活動への影響などが明確にされておらず、テラスを保育環境全体のなか位置づけるには至っていない。加えて、子どもが過ごす場所を選択する背景には、目的とする過ごし方に適する（小川, 2004）、親しみを喚起する（Clark, 2010）といった、その場所の特質が存在する。しかし、先行研究では、子どもがテラスを選択した理由が明らかではなく、場所としての特質が示されていないのが現状である。

加えて、子どもの場所や物に対するかかわりは、人的環境や時間的環境といった不可視的・非物質的環境とも不可分であるが（伊藤; 2004, 湯沢・鳥光, 2004, 岡野, 2008, 辻谷, 2014）、そうした観点からの検討が及んでいないことも、テラスという場所の機能と特質の解明を妨げているといえる。

本研究の目的と構成

以上を踏まえ、本研究では、保育環境における「境の場所」としてテラスに着目し、各対象園において子どもがテラスを用いた際のエピソードを質的に分析することで、その機

能と特質を明らかにすることを目的とする。その際、本研究では、機能を、子どもによるテラスの用途を分類したものとし、特質を、そうした機能が生じる理由となる場所の性質として区別する。この2点を合わせて明らかにすることで、各種の過ごし方がテラスで成立する条件や背景を捉え、保育環境におけるテラスの意義と独自性がより明確化できるほか、他の場所との比較や具体的な環境構成に対しても示唆的な知見が得られると考える。具体的には、次のような研究課題を設定した。

第一に、都市・建築研究に視野を広げ、複数の場所の間に存在する場所に関する論考を検討する。その上で、以後の分析の視点と課題を得る（第1章）。

第二に、先行研究では、対象とするテラスの機能が予め限定されていたこと、利用時の文脈などの分析が不十分であったことを踏まえ、対象園のテラスの機能と特質をボトムアップ的に描き出す。具体的には、A園の観察から収集したエピソードを、M-GTA（木下、2003）を用いて分析することで、子どもにとってのテラスの機能および特質を抽出し、それらの関係性の全体構造を描き出す（第2章）。

第三に、A園のテラスから得られた成果を基礎として、より多様な事例に応用できる知見の生成を試みる。まず、前章の結果などを踏まえたサンプリング作業を行い、対象園を追加する（第3章）。その上で、各園の観察で得られたエピソードを、M-GTAを用いて分析し、テラスの機能と特質に関する対象園間での共通性と独自性を明らかにする（第4章）。

第四に、不可視的・非物質的な環境の側面からテラスの機能と特質を検討する。ここまでの成果は、園ごとの時間の流れや規範・規則などと無関係ではない。以降では、各種の不可視的・非物質的環境の側面からの分析を行い、テラスの機能や特質をさらに明らかにする。まず、時間的環境に着目する。これまでのエピソードから、時間的環境との関わりが表出しやすいとされる「待つ」行為（岡野、2008）を含むものを抽出し、行為の対象と方法について分析することを通して、各園の保育の時間的環境におけるテラスの機能と特質を明らかにする（第5章）。次に、規範や規則、習慣などを意味する社会的環境の側面からの検討を行う。テラスで過ごす子どものエピソードに対する保育者の語りの分析から、園の人間関係や規範・規則と関連したテラスの機能と特質を明らかにする。（第6章）。

最後に、各章の結果を総合し、保育環境における「境の場所」としてのテラスの機能と特質をまとめるとともに、本研究が保育環境に関する研究および実践にもたらす示唆を明らかにする（終章）。

第1章 「境の場所」に関連する諸視点の整理

第1章では、日本の都市・建築研究から、場所と場所の間に存在する場所に対する論考を整理し、保育施設の「境の場所」およびテラスを検討する上での視点と課題を得る。

本研究に対して示唆的な論考として、まず、黒川（1996）による「中間領域」論があげられる。黒川は、家々を隔てる小路や、住居の縁側などの複数の生活空間の間に位置する場所を「中間領域」として重要視した。この「中間領域」論は、それらの場所が、異なる場所をただ隔てるだけでなく、両義性と曖昧性をもった緩衝空間となることで、その一体で生活する人々の交流や共存に寄与していたとする点で注目に値する。黒川は、「中間領域」

に対して、対立の原因となるあらゆる二元論を否定し、人々が共生するためのシステムとしての意味を見出している。

さらに、日本の建築物に関する論考には、その独特の境界設定に言及したものが散見される。たとえば、原（2007）は、ふすまなどの可動性をもった境界について、住まう者や状況に応じて、流動的に場所を定義するための仕組みであると述べる。加えて、Lazarin（2010）は、日本建築の縁側などは、固定性ではなく流動性を重視した芸術の表れであり、人々を安全な空間に囲むことよりも、新しい世界に拡張することを志向しているとした。これらの論考では、共通して、境界設定があいまいな場所の柔軟性・多義性が述べられており、日本建築が、場所の合理性よりも、主観的意味や移ろいといった不確かさを重視してきたことをあげている。

以上を踏まえて、先行研究における保育の「境の場所」へのアプローチを顧みると、保育室と園庭の間に存在する1つの場所として、場所の境界が明確に区分されていることが指摘できる（横山，1992；張ら，2003）。特定の場所を検討しようとする場合、対象とする場所の区分が必要なことは否めず、それは本研究でも例外ではない。しかし、そうしたなかで、場所の定義や境界のあいまいさをも含意した検討を行うことが、「境の場所」が持ち得る機能や特質の全貌を捉える上では必要といえる。また、黒川（1996）が、「中間領域」にコミュニティ全体の共生システムを見出したように、「境の場所」を園環境全体のなかに位置づけ、そのなかでの機能や特質を検討することも、考察の際の有効な視座といえる。

第2章 A園におけるテラスの機能と特質

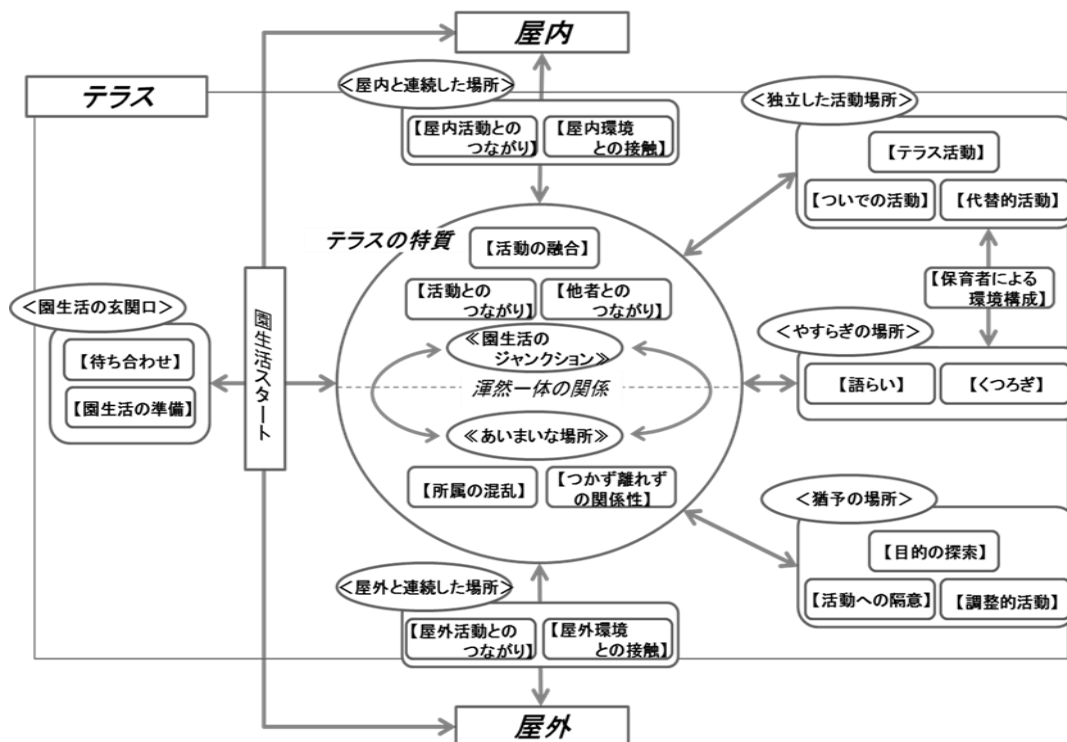
第2章では、A園のテラスが、子どもの生活・活動に対してどのような機能と特質を有するかを明らかにする。

A園のテラスは、園庭と4歳児および5歳児保育室の間に存在しており、それらを行き来する玄関・通路となっている（表1）。こうしたテラスは、半屋外空間を有する幼稚園の約68%に該当する形態と同様であり（張ら，2003）、応用範囲の広い成果が得られると考える。また、子どもの自由な活動を重視する保育方針のため、子どもがテラスを任意で使用する場面が多用に観察できることも予想された。同園において、2010年7月から2011年7月までの計36日間、午前の保育時間中の子どもの様子を観察し、子どもがテラスを通行以外の目的で使用した場面をエピソードとして文章記録化した。このエピソードを、データから対象とする現象の構成要素を抽出し、それらのまとまりや関係性を描出できるM-GTA（木下，2003）を用いて分析する。

分析の結果、A園のテラスは【園生活の玄関口】（園生活を開始するための準備・関係作りを行う）、【屋内と連続した場所】（屋内環境とつながる・接触できる）、【屋外と連続した場所】（屋外環境とつながる・接触できる）、【独立した活動場所】（周囲と異なる独自の活動が展開できる）、【やすらぎの場所】（落ち着いた状態での休息・語らいができる）、【猶予の場所】（周囲との関心のズレなどを調整できる）という性質の異なる6つの機能を合わせ持ち、幅広い局面で活用されていることが明らかとなった（図1）。

また、こうした機能が成立する場所の特質として、《園生活のジャンクション》と《あ

いまいな場所」の2つが浮かび上がった。周囲に開かれたA園のテラスは、そこで過ごす子どもと周囲の他者や活動を接合する「園生活のジャンクション」となる。こうした特質は、とりわけ、仲間や活動と合流したい、誰かに活動を披露したい、遊びの範囲や内容を拡大したいといった子どもの思惑と合致し、各種の機能が発揮される要因となっていた。さらに、屋内にも屋外にも完全に属さないテラスは、周囲との【つかず離れずの関係性】が成立する「あいまな場所」となる。このために、テラスでは、周囲に対して一体的に用いることも、適度に距離をとることも可能であり、子どもの複雑な要請に応じて、周囲との関係性が調整できる柔軟な場所となっていた（境, 2012）。



結果図の見方：「コア・カテゴリー」、<カテゴリー>、【概念】斜体=それ以外で図を説明する語句
矢印=用途間の関係性の方向，実線枠=各概念・カテゴリーが示す範囲

図1 A園のテラスの機能と特質の全体構造

第3章 テラスの多様性を踏まえたサンプリング

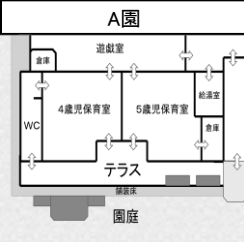
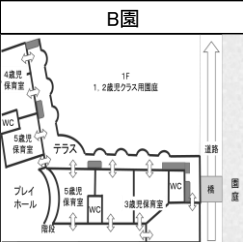
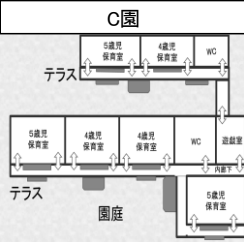
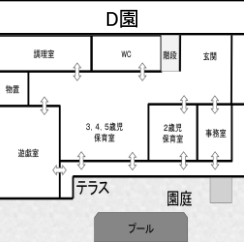
前章では、A園について個別具体的な検討を行い、1つのテラスが担う機能の多様さや、各特質との関係性等を詳細に明らかにした。他方、こうした知見は、対象としたA園の特徴と不可分であり、異なる施設のテラスの機能や特質を網羅し、広く説明するといった性質のものではない。保育環境におけるテラスが持ち得る機能や特質をより幅広く捉えるため、また、多様な施設におけるテラスの機能や特質を予測し、今後の研究や実践のなかで応用可能な枠組みを得るためには、複数の対象施設を設定し、A園も含めた相互の共通性や独自性を明らかにすることを目指した研究がさらに必要となる。

本章では、理論的サンプリング（木下, 2003）の手続きに依拠し、そうした多様性を踏

まえた知見を得るための対象設定を行う。理論的サンプリングとは、最初の対象に対する分析結果を軸とし、それとは対極の特徴を有する対象などを追加していくことで、理論の幅の拡大や深化を図る方法である。

A園をサンプリングの軸とした上で、前章の成果と先行研究の知見を総合し、対象を追加する際の観点として、テラスの奥行きの大きさ（張ら, 2003）と、規則やスケジュールと関連した利用の自由度（Walsh, 2000）、さらに、周囲の場所との隣接状況を見いだした。最終的に、A園を、テラスの奥行きが大きく利用の自由度の高い園と特徴づけた上で、奥行きが大きく利用に制限のあるB園、奥行きが小さく利用に制限のあるC園、奥行きが小さく利用の自由度が高いD園と、それぞれ対となる特徴をもつ3園を対象に選定した。各対象園の詳細は表1に示す。

表1 4対象園の概要

		A園	B園	C園	D園
テラスおよび周辺の配置					
テラスの形態・保育スケジュールなど	園庭とのつながり	段差なし	橋を挟んで接続	段差あり	段差あり
	隣接する屋内空間	保育室×2 トイレ	保育室×7 ホール	保育室×4または2内廊下 トイレ	保育室×2 職員室 遊戯室
	屋内とのつながり	引き戸	引き戸 カーテン	引き戸	引き戸
	奥行き	2.25m (陥入部は4.25m)	2.30m (膨らみ部は3.20m)	1.70m (段差部含め2.00m)	1m
	共有する年齢	4,5歳児	3,4,5歳児	4,5歳児	2,3,4,5歳児
	施設定員	90名	250名	210名	63名
	午前中の保育の流れ (日により多少前後あり)	8:50 順次登園 9:10 自由活動(11時まで継続の場合あり) 10:30 設定保育 12:00 昼食	7:00 順次登園 9:00 自由活動(活動場はクラス毎に設定) 10:30 設定保育 12:00 昼食	8:30 順次登園 9:00 朝の集まり 9:30 設定保育 10:30 自由活動 11:30 片付け・昼食	7:30 順次登園 9:30 クラス活動(他施設「自由活動」とされ内容も含む) 12:00 昼食
備考	玄関兼用	場所移動に一定の制限あり	玄関兼用・通園バスあり	環境全体が手狭	
観察状況	観察期間	2010年7月～2011年7月	2013年4月～2014年3月	2013年6月～2014年5月	2013年7月～2014年6月
	時間帯(多少前後あり)	8:50～11:00	8:00～11:00	8:30～11:30	9:00～11:00
	実施日数	36日	22日	16日	18日
	エピソードの総数	83	80	56	59

第4章 4施設にみるテラスの機能と特質の共通性と独自性

本章では、以上の4園について、テラスの機能と特質を分析するとともに、対象間での比較からその共通性と独自性を明らかにする。

新たな3園について、表1のように観察を実施し、子どもがテラスを用いた場面を文章化したエピソードを収集した。本章では、これらにA園のエピソードを加えた全278エピソードから、第2章と同様にM-GTAを用いてテラスの機能と特質を明らかにする。分析は、第2章の結果(図1中の「概念」など)を継承し、追加データを踏まえて結果の発展を図る形式で行った。ただし、本章では、施設間での比較を要するため、構造モデル(図

1)ではなく、園ごとの用途(「概念」)や機能(「カテゴリー」)に該当するエピソード数を一覧できる表として分析結果をまとめ、その偏りや内容の傾向を検討した。

結果として、4園のテラスには《生活・活動のジャンクション》、《つかず離れずの関係性》、《柔軟な生活・活動場所》、《生活・活動の周縁》という特質(「コア・カテゴリー」)と、それらに関連する8つの機能が共通して存在することがわかった(表2)。これら4つの特質は、それぞれが完全に独立して存在するのではなく、複合的に個々の機能を成立させる。たとえば、テラスが子どもにとっての<生活・活動の止まり木>として機能する背景には、テラスが周囲に属さない《生活・活動の周縁》であるだけでなく、周囲との関係性を適度に保ち(《つかず離れずの関係性》)、生活・活動への復帰が容易な《生活・活動のジャンクション》であることも関連する。また、先行研究(張ら, 2003)では、テラスの奥行きが小さい場合では、遊び場としての機能が狭まることなどが指摘されていた。しかし、本章では、奥行きの小さいD園においても、周囲の場所と一体的に利用されることで(【活動範囲の延長】)、同様に子どもの遊びの範囲や内容を拡大させ得ることなどが明らかとなった。つまり、テラスの機能とは、1つの場所や特質の枠を超えて成立するものであり、子どもの状況に応じて、周囲の場所の要素や4つの特質がさまざまに組み合わせることで、幅広い用途が発揮されていることが示唆された。

他方、各用途に関するエピソードの傾向や内容については、園ごとの独自性がみられた。そうした独自性は、テラス自体の奥行きやルールよりも、周囲の場所または環境全体の大きさや条件と深く関連することがわかった。たとえば、環境全体が手狭なD園では、テラスは不足する活動スペースを補う、また節約するために用いられるようになり、園庭が使用できる時間帯が限られたB園では、保育室だけでは実現が困難な活動を展開できる場所としての側面がより顕著になる。園ごとのテラスの独自性は、保育室や園庭からあふれた子どもや、保育室や園庭だけでは満ち足りない子どもの要求に順応することで顕在化する。共通性の考察とも合わせて、保育環境におけるテラスは、園環境全体のなかにおいて、個々の子どもの生活・活動を充足させるシステムの1つと位置づけられる。(境, 2015a)。

表 2 生成された「概念」等の関係性および園ごとの該当エピソード数の一覧

コア・カテゴリー (特質)	カテゴリー (機能)	概念 (用途)	概念の定義	A園	B園	C園	D園	合計	
生活・活動の ジャンクション (子どもを異なる生活・ 活動の文脈、あるいは 人や集団との関係性へ と接合する。)	移行の渦中	家から園の移行	保護者とともに登園してきた状態から園で生活・活動するための状態になること。	11	11	6	0	28	
		移行の拒否	生活・活動に関する移行に対して、泣く、怒るなどの抵抗を示してテラスに留まること。	6	4	1	1	12	
		移行の保留	強い抵抗は示さないが、テラスに留まり、生活・活動に関する移行を完了しないこと。	12	2	10	2	26	
	移行の緩衝	周囲参加の動機・ タイミングの模索	周囲で展開される集団生活・活動に参入するためのきっかけをテラスで模索すること。	10	6	5	6	27	
		周縁的活動参加	周囲で展開される活動に対して、テラスから何らかの関与をすること。	5	0	3	12	20	
		活動に向けた 調整・確認	テラスで周囲の場所で行う活動のための打ち合わせやメンバー調整などを行うこと。	7	3	2	10	22	
		周囲への勧誘	テラスにいる際に保育者や他児から周囲の場所での活動に明示的に誘われること。	6	1	1	2	10	
	安定した通路	活動のつなぎ	活動と活動の間に生じたズレや空白を調整する目的でテラスに留まり過ごすこと。	6	4	9	4	23	
		相手との合流	登園してくる、もしくは、通行してくる他児と接触するためにテラスで待ち構えること。	7	1	5	3	16	
		通行人の取り込み	テラスを通行する、もしくは、テラスにいる他者を自身の活動に取り込むこと。	13	10	6	5	34	
つかず離れずの関係性 (周囲に対するつながり と分離が両義的に成立 する。)	周囲とのつながり	移動の活動化	テラスを通行することに、何らかの意味を付加して一つの活動とすること。	2	8	7	2	19	
		屋外とのつながり	テラスにいないが屋外(園庭等)の他者・活動・環境・情報などと関わること。	19	18	5	14	56	
		異質な生活集団 との交流	異年齢児や保護者など、異なる領域で生活している他者とテラスで交流すること。	9	16	3	5	33	
		屋内とのつながり	テラスにいないが屋内(保育室等)の他者・活動・環境・情報などと関わること。	4	8	2	6	20	
	周囲からの分離	非参与観察	周囲の活動などに対してテラスから不参加を前提にした観察を行うこと。	6	10	8	4	28	
		遮蔽・仕切りの活用	ドアや壁などによる周囲からの分離状態をテラスでの生活・活動に活用すること。	5	9	3	2	19	
		集団生活からの離脱	園庭や保育室での主立った生活・活動の文脈に属さずにテラスで過ごすこと。	6	5	3	4	18	
	柔軟な生活・活動場所 (各園の状況に応じて、 各種の制限や領域 区分にとらわれない用 い方ができる。)	寄り道的活動	保育者の回避	テラスで過ごすことによって保育者の課スルールや活動から逃れること。	2	3	0	0	5
			意図していた移動や活動を中断しテラスで一時的に別の活動を展開すること。	6	4	3	3	16	
		設置物による活動	テラスの設備や設置物の使用を意図した活動、もしくは、取り入れた活動のこと。	14	5	11	4	34	
周囲で展開されていた活動がテラスに持ち込まれると同時に内容的な変化が生じること。			13	6	11	12	42		
異質な場所		場所への見立て	テラスの空間的特徴などが見立てとして活動に反映されること。	4	2	2	3	11	
		開放された場所	活動範囲の延長	周囲(テラス)の活動が大きく変質せずにテラス(周囲)にまで延長されること。	11	5	4	14	34
			縦横無尽な活動	投げる、走りまわる、飛び跳ねるといった大きな動作や移動を伴う活動の展開すること。	1	12	4	1	18
生活・活動の周縁 (いずれの「主要」にも 場所完全に属さず、 規範や雰囲気とも 距離をおく。)	隠れ家的な場所	汚れ・濡れの解禁	床や設備が泥や水に接するような活動を展開すること。	1	6	2	2	11	
		独占的空間	特定の内容やメンバーで閉じられた活動を展開するためにテラスが選択すること。	5	2	0	3	10	
	生活・活動の止まり木	グレーな活動	保育者などに発見された際に、制止や変更が求められる可能性がある活動を展開すること。	9	10	1	3	23	
		おしゃべり活動	他者との会話を目的とする活動を展開すること。	6	10	5	7	28	
		合間のくつろぎ	生活・活動の空白や転換期にテラスに留まって落ち着いて過ごす、休息をとること。	8	3	7	5	23	
合間の立ち寄り	生活・活動の合間にテラスを訪れ、一時的に別の活動を行うこと。	2	7	3	11	23			

第 5 章 保育の時間的環境におけるテラスの機能と特質

子どもの場所や物に対するかかわり方の背景には、時間の流れや規則・規範などの影響が存在するとされる(山本, 2000; 有馬, 2012)。以降では、そうした不可視的・非物質的な環境の側面に視野を拡げ、テラスの機能や特質との関連性を明らかにしていく。第 5 章では、保育の時間的環境に着目し(岡野, 2008; 有馬, 2012)、テラスにおいて子どもがどのような時間の流れと、どのようにかかわっているかを分析することで、保育の時間的環境におけるテラスの機能と特質について考察する。その際、前章までの対象とエピソードを引き継ぐことで、園の特徴との関連性も合わせて明らかにする。

子どもと時間的環境とのかかわりを捉える上で適した場面として、子どもが自他の時間

の流れの差異を認識し、調整する場面といわれる「待つ」行為の場面があげられる（鷺田，2006；岡野，2011）。本章では、前章にて収集した全4園計278エピソードのうち、「待つ」行為の場面を含む61エピソードを対象とする（A園16エピソード、B園12エピソード、C園22エピソード、D園11エピソード）。それらのエピソードから、テラスにおける「待つ」行為の対象と方法に関する箇所を抽出し、佐藤（2008）を参考にコーディングを行い、一覧表として整理した。

その結果、各園のテラスでは、11の対象に対する7種の「待つ」行為が展開されており、子どもが自身の時間の流れと他者や集団の時間の流れとの差異を経験し、その調整を行う場所となっていることがわかった。また、そうした調整の方法は、4種に大別できた。特筆すべきは、調整のほとんどは、相手からの歩み寄りや状況の変化に委ねる「消極的待ち方」や、それまでの間をやり過ごす「紛らわし活動」によって行われていることである。このことは、時間割が明確に定められたB園やC園においても同様であり、自身と周囲との時間の流れのズレに対する子どもの対応には、共通して余裕や寛容さがみられた。周囲とつかず離れずの関係を保てるテラスでは、子どもは安心してその場に留まることができる。また、通行の要衝であるために、「待つ」行為の対象やその代わりとなる対象がほぼ確実に訪れる。こうした場所の特質のために、テラスは、「(集団で)〇〇をする時間」を共有する保育室や園庭の時間的環境に対して（中田，2013）、子どもが自他の時間の流れの間に留まりながら、緩やかに周囲との調和を図る場所として機能しているといえる。

第6章 保育の社会的環境におけるテラスの機能と特質

子どもの生活・活動を方向付ける不可視的・非物質的な保育環境として、もう一つ、規則や規範、習慣などを含む社会的環境があげられる（園山・秋元・板垣・小林，1989；永瀬・倉持，2011；辻谷，2014）。こうした保育の社会的環境は、保育者の存在と密接に関連しており、保育者が子どもに対する権力者や監視者、または拠り所となることで、施設で共有される規範や習慣の核となることが示唆される（山本，2000；金子・境・七木田，2013）。本章では、保育者へのインタビュー調査から、テラスを用いる子どもに対する保育者の意識や介入の方針、テラスの利用に関連する規則や習慣などを明らかにすることを通して、保育の社会的環境におけるテラスの機能と特質について考察する。

本章では、前章までに収集したエピソードなどを踏まえて、当該園の保育者へのインタビューやその後の分析を行う。最終的に、調査への適正や倫理的な理由を考慮し、D園の保育者6名を対象に選定し、グループインタビューを実施した。インタビューに先駆けて、施設内研修を通して、前章までに明らかとなった子どもによるD園のテラスの利用状況について、具体的なエピソードと関連する映像や写真を交えて報告・討議し、調査者と対象者の観点の差異を把握する機会を設けた。後日、改めて対象者に対して、テラスで過ごす子どもに対する意識や介入の方針などを尋ねるインタビューを行った。その際、実践の想起や語りを促す目的で、写真や映像を伴ったエピソードを再度提示した。分析には、単一のテキストデータを掘り下げ、意味内容に沿って再構成することに優れたSCAT（大谷，2007；2011）を用いた。

分析の結果、D園の保育者は、「テラスだから」という理由で介入を控えるようなことはないが、子どもの自由な活動を尊重しようとする園の方針と、保育室や園庭のどこにいても、目の端で互いの状況が把握できるというテラスの物理的な特質が合わさることで、テラスが、集団の規範や習慣からの逸脱が許容される避難場所として機能している構造が明らかとなった。一方で、意図的な介入を控えるに保育者に代わって、年長児が規則の維持・運用主体となることで、保育歴の長い子どもを中心としたテラスの社会的環境が新たに生じる可能性も示唆された（境, 2015b）。

終章 総合考察

終章では、これまでの検討を踏まえた上で、研究全体を通じた主な成果と、先行研究および今後の研究や実践に対する意義を示す。

第1に、各種のテラスが有する機能を幅広く明らかにするとともに、場所の特質と合わせて提示したことである。これまでにテラスを扱った研究では、テラスを「遊び場」などとして捉え、そのための環境構成のあり方が提唱されてきた。また、テラスでの活動と、他の場所での同様の活動の差異が明らかではなかった。本研究では、子どもがテラスを、遊びのほか活動の準備や休息、集団からの離脱など幅広い用途で用いており、その背景には、周囲とのつかず離れずの関係性をはじめとしたテラスの特質があることがわかった。これらの知見は、保育環境におけるテラスの全体像を示す一枠組みといえる。また、テラスにおける子ども理解や環境構成に対して、「遊び場」などに留まらない観点を与えるとともに、そうした観点から評価されてきたテラスの意義を問い直すものである。

第2に、テラスと周囲の場所や保育環境全体との関係性を検討することで、複数の場所に跨がって展開される、保育環境における子どもの生活・活動の実態の一端を明らかにしたことである。本研究では、テラスが、保育室と園庭の「境の場所」であることに留意して検討を行った。その結果、テラスが、周囲の「主要」な場所では展開しづらい活動や、得がたい過ごし方を受け入れる場所となることで、環境全体として、個々の子どもの生活・活動を充足させる構造が成立していることがわかった。また、「主要」な場所と一体的、階層的に用いられることで、そうした場所での生活・活動の展開を助長していることも明らかとなった。こうした成果は、保育室や園庭などでの子どもの生活・活動のなかにテラスという「境の場所」を位置づけ、より動的にその展開を捉えるための示唆となり得る。

第3に、奥行き的大小や周囲との隣接状況が異なるテラスが、それぞれの保育方針をもった施設のなかでどのように機能しているかを明らかにすることで、今後の研究および実践に応用可能な基礎的枠組みを提示したことである。第1の意義とも合わせて、テラスやその周囲の環境の設計や構成の結果、保育方針の変更に伴う子どもの動きの変容などの予測に対して有用な成果であり、今後のアクションリサーチ型の研究や、環境構成および実践計画に資するものといえる。また、各園が抱える問題との関連性を捉え、環境全体を調和させる「境の場所」という観点から、各園のテラスを評価し得ることを示したことは、施設の運営者などに対する、テラスをめぐる認識や選択のオルタナティブの提示といえる。

最後に、本研究の課題と限界を端的に述べる。本研究では、テラスを「巧み」に利用し

て、自己実現を図る子どもの姿が明らかとなったが、縦断的な検討などを行っていないため、その場所が子どもによって理解され、使いこなされるまでのプロセスや条件の解明には至っていない。また、園の保育理念や保育者文化といった要因が、テラスの機能や特質に及ぼす影響の検討が十分ではないことも課題といえる。加えて、本研究では、テラスのような場所を持たない施設を対象に含んでおらず、そうした施設に対する説明や具体的な示唆が不足している。加えて、オープンスペース型のテラスや循環構造をもつテラスなど、各種の先進的とされる事例との比較も課題である。

引用文献

- 秋田喜代美 (2010) 保育のおもむき. ひかりのくに.
- 有馬知江美 (2012) 保育者が認識すべき「子どもの時間」の多角的考察. 白鶴大学論集, 26(2), 217-236.
- Clark, A. (2010). *Transforming Children's Spaces: Children's and Adults' Participation in Designing Learning Environments*. Routledge; 1 edition. 98-115.
- 張嬉卿・仙田満・井上寿・陽熹微 (2003) 幼稚園における半屋外空間に関する研究. ランドスケープ研究: 日本造園学会誌, 66(5), 437-440.
- 藤田大輔・山崎俊裕 (2000) 幼稚園における園児の遊び特性と構築環境の関わり. 日本建築学会研究報告集, 70, 361-364.
- ジェフリー・ムーサス (2008) 「縁側」の思想. 祥伝社.
- 原広司 (2007) 空間: 機能から様相へ. 岩波書店.
- 廣瀬聡弥 (2007) 幼稚園の屋内と屋外における様々な遊び場所が仲間との関わりに及ぼす影響. 保育学研究, 45(1), 54-63.
- 伊藤恵子 (2004) 文字への関心を友達への関心へと変えていった保育者の存在: 自閉傾向を伴う子どもに対する人的環境としての保育者. 保育学研究, 42(1), 29-41.
- 金子嘉秀・境愛一郎・七木田敦 (2013) 幼児の固定遊具遊びにおけるルールの形成と変容に関する研究. 保育学研究, 51(2), 28-38.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践: 質的研究への誘い. 弘文堂.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針解説書. フレーベル館.
- 黒川紀章 (1996) 新・共生の思想: 世界の新秩序. 徳間書店.
- Lazarin, M. (2010). *Japanese Architecture: Place as Transition*. 龍谷大學論集, 476, 28-44.
- 松本博雄・松井剛太・西宇宏美 (2012) 幼児期の協同的経験を支える保育環境に関する研究: モノの役割に焦点をあてて. 保育学研究, 50(3), 287-297.
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領. 教育出版.
- 文部科学省 (2014) 幼稚園施設整備指針.
- 無藤隆 (1997) 保育における場所の意味: 製作コーナーの分析. お茶の水女子大学人文科学紀要, 50, 261-288.

- 永井理恵子 (2005) 近代日本幼稚園建築史研究：教育実践を支えた園舎と地域．学文社．
- 永瀬祐美子・倉持清美 (2013) 集団保育の片付け場面における保育者の対応．保育学研究, 51(2), 235-244.
- 中田基昭 (2013) 子どもから学ぶ教育学：乳幼児の豊かな感受性をめぐって．東京大学出版会．
- 小川博久 (2000) 保育援助論．萌文書林．
- 小川博久 (2005) 保育者にとって「カリキュラム」を作るとはどういうことか：保育者の「時間」と幼児の「時間」の関係を問うことを通して．幼年教育研究年報, 27, 39-51.
- 小川信子 (2004) 子どもの生活と保育施設．彰国社．
- 岡野雅子 (2008) 幼稚園・保育所における「遊びの流れ」と「日課的時間割」の関係について (第 1 報)：保育者への質問紙調査に基づく 1987 年と 2007 年の比較．日本家政学会誌, 59(12), 945-953.
- 岡野雅子 (2011) 現代の時間的環境における保育に関する研究．風間書房．
- 大谷尚 (2007) ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54(2), 27-44.
- 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法．感性工学：日本感性工学会論文誌, 10(3), 155-160.
- 大伴純子 (2006) ピアジェ理論と幼児教育Ⅳ：保育における片付け活動の検討．国立音楽大学研究紀要, 25, 23-33.
- 境愛一郎 (2012) 「境」としてのテラスは幼児にとってどのような場所であるのか．保育学研究, 50(3), 75-85.
- 境愛一郎 (2015a) 保育環境における「境の場所」の機能と特質：4 施設にみる共通性と多様性．教育学研究ジャーナル, 17, 21-30.
- 境愛一郎 (2015b) 保育の社会的環境における「境の場所」に関する研究：子どものテラス利用に対する保育者の意識．広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学関連領域), 63, 155-164.
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法：原理・方法・実践．新曜社．
- 佐藤将之・西出和彦・高橋鷹志 (2004) 遊び集合の移行からみた園児と環境についての考察：園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その 2．日本建築学会計画系論文集, 575, 29-35.
- 佐藤誌津・佐藤将之 (2012) 保育施設の半屋外空間を中心としたこどもの行動様態に関する考察．学術講演梗概集 2012(建築計画), 573-574.
- 仙田満 (2009) こどものあそび環境．鹿島出版会．
- 高木真人・朝妻秀雄・永田恵子 (2012) 保育園の縁側空間の形態とあそび時間における滞留特性：こどもの外遊びを活性化させる空間としての縁側の可能性 その 2．学術講演梗概集 2012(建築計画), 571-572.

- 高木真人・小川一人・仙田満 (1998) 昭和期住宅の廊的空間における機能に関する研究：縁側・廊下におけるこどものあそび行為の変遷を中心として．日本建築学会計画系論文集, 507, 95-101.
- 園山繁樹・秋元久美江・板垣健太郎・小林重雄 (1989) 幼稚園における自閉性障害児のメインストーリーミング：機会利用型指導の試み．特殊教育学研究, 26(4), 21-32.
- 辻谷真知子 (2014) 4 歳児クラスにおける幼児間の規範提示：根拠の明示と関係性に着目して．保育学研究, 52(2), 197-209.
- Walsh, D. J. (2000). *Space and early schooling: from culture to pedagogy*. 兵庫教育大学学校教育学研究, 12, 123-137.
- 鷲田清一 (2006) 「待つ」ということ．角川選書.
- 山田恵美 (2012) 幼児の活動の展開を支える保育環境：絵本コーナー内の場と読み方，保育学研究, 50(3), 29-41.
- 山本登志哉 (2000) 2 歳と 3 歳 群れ始める子どもたち：自立的集団と三極構造．岡本夏木・麻生武 (編) 年齢の心理学：0 歳から 6 歳まで．ミネルヴァ書房. 103-142.
- 由田新・由田由佳理・小川博久 (1994) 幼児の遊びを保証する環境条件とは何か(1)：遊び拠点形成に及ぼす物と空間の役割．東京学芸大学紀要 第 1 部門 教育科学, 45, 9-15.
- 湯澤美紀・鳥光美緒子 (2004) 3 歳児の学びの姿を探る：水プロジェクトを中心に．保育学研究, 42(1), 71-80.
- 横山勉 (1992) 保育所の平面構成に関する研究．福井工業大学研究紀要, 22, 175-183.